

戦火が激しくなった昭和十九年十月、私は蓮正寺の国産電気工場で飛行機のエンジンの組立に動員された。翌二十年三月、足柄国民学校卒業と同時に湯浅工場に入社した。新玉・本町・城内の各国民学校より入社仲間も各職場に配属されたが、軍需工場であるために自宅には帰れないことが分かってがっかりした。

総員二百名は、現在池上にある二階建てアパートに収容され、一室五名ずつの集団生活に入った。舎監数名が私たちの指導と管理に当たった。やさしい人、酷しい人、いじわるな人……いつの時代にもいるものである。生活は軍隊式で朝七時起床。現在の西相銀行より大橋を渡り、会社入口で一斉に「歩調をとれ」の合図で警備係前を通過。次いで並足となり、第一食堂で朝食を全員でとる。メニュー通りの食事を棚より取り、グループごとに約二十分で終わる。その後、各職場に急ぐが通路はすべて板塀で仕切られ、警備係が名前を呼んでチェックし、OKのサインで職場へ行くのである。胸章は色別により、共通職場のもの、単体のものがあって、みだりに他の職場に出入はできない。私は十名の仲間と練塗工場で働くことになった。当時の極板は長さ一・五m、巾〇・六mだったので、少年の私は苦勞をした。一枚ずつ丁寧に木枠に掛ける。部屋は一定の湿度を必要とするため蒸気が通っているので熱くて大変だった。陽極板は鉛粉に稀硫酸を練り合わせて格子体に塗布され、時間の制約は余りないが、陰極板は酸化鉛で稀硫酸とグリセリンを練り合わせるために硬化が早く、先輩によく怒鳴られていた。だから昼食時間は本当にうれしかった。そして自分の時間を大切にすることを知った。午後三時には、青年学校に行くため、現在の富士写真小田原工場の二階建ての校舎で機械学科の勉強をすること一時間。四時には舎監と共に宿舎に帰る。風呂に入って一日の仕事や家族の話など話し合い笑ったことは忘れられない思い出である。午後九時「消灯」の合図で、各人はトイレに行つてから就寝することになっていた。だが、私の部屋は二階のため、夜中のトイレは恐ろしく、止むなく廊下の消火桶を利用した。ところが二日目に発覚し、朝の点呼の時に舎監よ

り「この部屋は小便臭い」と言われて調査され、部屋の仲間同志が向き合ってシゴキを受けた。しかし、原因が分かり全体責任として「注意」にとどまり出社をした。そこで代表が舎監に対策を申し出て、通路の電灯に黒い袋を被せて点灯許可をもらうことになり、夜中の用便ができることになった。

戦争が激しくなり、舎監より全員残業の指示がでて病気以外は認めぬとのこと。夕方五時、六時、七時と就労時間が長くなり、疲労も増して、毎日が辛かった。今の時代なら、年少者就業法に違反することが行われていたわけだが、残業には夜食が出るので進んで残業をする仲間もいた。

次に風呂も怖いものの一つ。残業後に一斉に入浴するので裸になって順番を待つことがしばしば。ある日入口で数名の従業員が「今、組長が入浴中だから少し待つように。」と言われ、職場の上司と思っていたら、入墨をしたやくざの組長と聴きびっくりした。当分の間、この話は職場の話題となった。

話は戻るが、宿舎入居の当時は四時に退社してから入浴・食事をして、寝るまでは相当の時間がある。十五歳の年頃では、空腹は堪えられない。そこでアパートの近くの者は、自宅へ行って何か食べる物を持ってくるように話が決まり、毎日ではないが、井細田在住の者は鍋焼きを持ってきてくれた。私も母に話してズルチンを入れて甘くした鍋焼きを持参して喜ばれた。その後は、甘藷ばかりであった。

ある日のこと、母が近所の米屋より肥料用の豆粕を砕いて熱処理をしたものを食べたとき、咽が乾いて水を飲み、一人が下痢をしたため、一時は赤痢ではないかといわれ、仲間が豆粕のことは言わなかったので、原因不明のまま決着がついてホッとしたことがある。

敗戦の年の八月十三日、快晴の朝だった。いつもの通り午前七時ころに警戒警報が出ていた。サイレンが鳴っても解除になると思っていた。B二九がきれいに飛行機雲を残していく日が多く、空襲警報のサイレンもさして気にしない日々になっていた。ところが、この日の飛行機は低空なので友軍機と思い、皆仕事をしていた。

午前八時前後と思うが、数機の艦載機が急降下した瞬

間、ダツダツと機銃の音とともにポカンポカンと爆弾攻撃を受けた。仕事どころか、隣の化成の屋根は傾き、入口はどこか分からないので、ウロウロするだけだった。そのうち爆音がしなくなったので、やっと我に帰ったが、その間、何がどうだったか、全く判らない。外へ出たら「消火、消火」と言われたが、水は出ないし、火は広がるばかりで、手はつけられなかった。自分の防空壕に入ろうとしたら、数人倒れている。頭から血が噴いて髪が顔一面に下がっている。海軍の方が、「本部、本部」と言われたので、どこが本部か分らないが、夢中で「本部、本部」と連呼しつつ進んだら本部についた。そこで「死んだ、死んだ」と告げ、手をつないで現場へ行き、始めて直撃を受けたことが分かった。全員救助に来てくれた。私も大先輩を戸板にのせて診療所に運んだが、この方は小林病院で帰らぬ人となった。その後は、火災現場に行かず、母の顔が浮かんで帰ることしか考えず、壊れた塀を乗り越えて、今の北分署の前に来た時に、二百m先に母が立っているのに気がついた。無我夢中で母親の胸に飛び付いた。

当時、足袋屋をして近所の足袋・脚絆・手甲などを作っていた顔見しりの方から「お前の子供の職場は被爆して全滅だ」と言われて、母は私の帰りを待っていたのでした。あの時、あの防空壕に入っていたら今の私はない。帰宅して裏の竹藪の横穴防空壕に母と行き、近所の人が多勢いたので安心した。所が近くでバーンと音がした。壕の中の人はびっくりした。現にある北分署の裏側にあった横穴防空壕の前に電車が止まっていて、ガヤガヤ人の話し声が聞こえる。壕の人と行ってみると壕の入口が土で埋まっっていて中から人声がする。この直後に足柄国民学校に駐屯中の陸軍兵士が多勢来て掘り始めた。子供を抱えた母親や年寄が救出された。兵士の指示で旧小田原製紙工場（現グリーンタウン）へ運ばれたが、神原さん、清水さんの一家が死亡された。

この被爆があつてから数日後、会社に行き、指示で死体の発掘作業をすることになったが、猛暑の日が続く中なので苦痛だった。工場敷地が田を埋め立てたものなので、地下水が湧き、臭気で気分を悪くする人も多数いた。数日間掘り続けたが、三遺体は発見できなかった。

